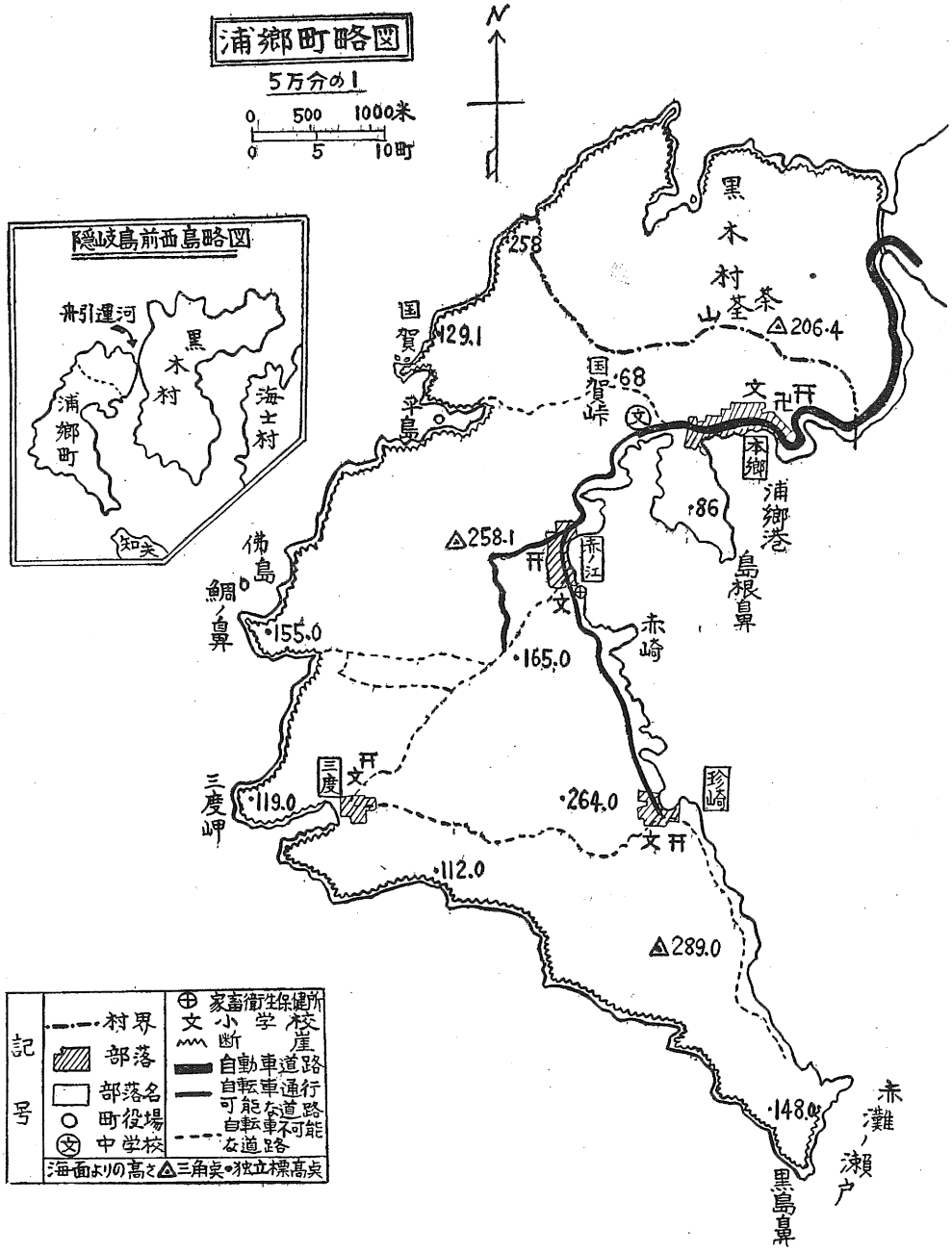
浦郷町略図
5万分の1
0 500 1000米
0 5 10町
N
隠岐島前西島略図
舟引運河
黒木村
浦郷町
海士村
知夫
黒木村
茶屋山
△206.4
258
国賀
129.1
国賀峠
68
平島
文
卍
本郷
浦郷港
86
島根鼻
△258.1
赤江
佛島
鯛ノ鼻
155.0
赤崎
165.0
三度
三度岬
119.0
264.0
珍崎
112.0
△289.0
148.0
赤灘ノ瀬戸
黒島鼻
記号
村界
部落
部落名
町役場
中学校
家畜衛生保健所
小学校
断崖
自動車道路
自転車通行可能な道路
自転車不可能な道路
海面よりの高さ △三角点 ・独立標高点

第1章 緒　　論

第1節 調 査 目 的

隠岐島は日本海の孤島であり，昔は流人の島として後鳥羽上皇や後醍醐天皇，その他多くの人々が流された所としてよく知られ，それらの遺跡や種々の伝説があり，風光明媚なこととともに有名である。農業関係からすると隠岐牧畑があつて，その一種変つた農業経営方式は現在わが国の何処にも見ることのできない珍らしい存在であり，農業研究者ことに農業経営研究者及び農業地理研究者の注目するところであつた。このように隠岐島は一般的にはその一面が捕えられ，美しく画かれているが，そこに住む四万余の島民の生活の実態とその発展について明かにしたものは少なかつた。

絶海の孤島である隠岐はその遠距離と地勢の不利により経済の発展を遅らせ，ひいては遅れた文化生活に甘じなければならなかつたのである。この取り残されがちな後進性の恢復が近時問題となり，離島振興法の如き特別な立法によりその振興が企図されるに至つたのである。これは隠岐島の産業振興と島民の生活向上にとつて絶好の機会である。離島の振興は産業開発が根本であり，それは資源の合理的な利用と島民の勤労にまたねばならないが，その開発の契機は資本であり，技術でなければならない。われわれはこの隠岐振興について多大の関心をもつていたのであるが，たまたま隠岐農業振興の基礎的資料を提供するため調査研究の機会が県当局より与えられた。その才一着手として隠岐島独特の牧畑農業に調査研究を集中することとなつた。そして牧畑農業の実態を究明することを才一の，また最大の目的とした。それは牧畑の改善のために基礎的な，不可欠な前提であるし，日本農業解明の一部としての意義をもつとも考えたからである。従来牧畑に関する研究は多々あるが，多くは10～20年以前のものであり，また残された分野も多々あるように考えられ，それらだけでは将来の振興計画をたてるに不充分であるとの結論に達したからである。われわれは専門を異にする者の共同研究の方法によつて，あらゆる角度から調査研究し，牧畑農業を分析し，実態を明かにすることを目的とした。その実態の中から当然に種々の問題点が浮び上つて来るはずである。牧畑改善の問題点は何処にあるかの問題把握が本調査の才二の目的である。この問題点の探求についでは，その解決策の提案が当然なさるべきであろう。解決策の提案こそ最も振興計画に大きい関係があるからである。けれどもこの提案は困難な仕事である。農業は自然的条件に支配されることは勿論，他方歴史的所産であつて社会的，経済的諸条件，又は農業者の個人的事情によつて左右される。それらの諸条件の錯綜せる作用を全部解明することは短日月に不可能であるし，また一応均衡をもつ現在の農業の一部を改めることは，必ず他へ影響し，予期しない種々の好ましからざる結果が生じうるし，又実践は結局農家がやるのであり，その受入態勢，資本，能力，危険負担

その他種々の困難な問題があつて，実行は容易ではないからである。なおその提案のためには実験や試作が必要となり，相当長い期間の観察が必要な分野もあるのである。これらを省みずただ思いつきを提案しても意味が少いと考えざるをえない。故に本調査では牧畑の実態と問題の所在の究明を重点とすることとした。改善の提案を最後にすることとするが，それは研究の現段階における一応の結論であり，より具体化するためには他日を期さなければならない。けれどもわれわれの本調査の目的は学問的探求のみでなく，その応用としての隠岐島振興，ことに農業振興計画のための参考資料を提供するにあり，本報告はその才一段階にあたるものである。

第2節　調　査　方　法

(1) **調査対象**　隠岐牧畑を調査するのであるが，現在牧畑の多く残存しているのは島前の浦郷町，知夫村，海士村の一部であり，今回は最も典型的な牧畑を残していると云われる浦郷町牧畑を対象とした。必要に応じて隠岐島全体の牧畑を見たが実態調査は浦郷町に集中した。

(2) **調　査　時　期**

予　備　調　査　　昭和28年5月30日～6月　5　日

本　調　査　　全　　年8月　3　日～8月12日

(3) **調査班の編成と分担**

(a)	浦郷町の概況	講　師　細野誠之		
(b)	牧畑と農業経営	助教授　坂本四郎	助　手	竹浪重雄
			助　手	松本久志
(c)	牧畑の土壌	助教授　小柴尚博	助　手	十川　博
			副　手	金築俊郎
(d)	牧畑の養畜技術	講　師　青木晋平	助　手	村上五月
(e)	牧畑の草生	教　授　田草川春重	副　手	柏木洋吉
(f)	牧畑の耕種技術	教　授　嵐　嘉一	助教授	高野圭三
			助教授	安達一明
(g)	牧畑の山林	助教授　遠山富太郎	助教授	成田恒美
(h)	隠岐島の食糧需給	講　師　齊藤政夫	助　手	松本久志
			副　手	鶴原　稔

(4) **調　査　方　法**

(a) 浦郷町の概況　　主として町役場，農業協同組合，漁業協同組合等における統計書類，事情聽取により調査し，その他文献資料等をも参考にした。

(b) 農業経営　　30戸の農家を部落別，専兼業別，耕作規模別を考慮して選択し，一定の調査表により聽取調査を実施した。

(c) 土　　壌　　牧畑内の草地，林地，耕地及び本畑を町内全域にわたり，ことに各牧

別，山の上方と下方別に表土と心土を分ち土壌を採取し，帰学の上その土壌を分析した。

(d) 養畜技術　各部落において数名の養畜農家に参集を求めて聽取調査をなすと共に，放牧中家畜の個体調査や人工授精所，家畜商等において畜産事情を聽取した。

(e) 牧畑の草生　各牧にわたり17ケ所で代表的草生地を選び，一米平方の調査区を設けて草生状態を調査した。

(f) 耕種技術　各部落において数名の比較的上位の当業者の参集を求め，作物栽培技術を中心に全般的な聽取調査をなすと共に，牧畑の各牧にわたり耕地並びに夏作物栽培の状態を補足的に観察調査を行つた。

(g) 山林　各牧にわたり代表的林地10ケ所につき15平方米の調査区を設け，毎木の胸高直径，樹高を測定して材積を求め，なお標準木の樹幹析解を併せて材積及び成長量を測定した。

(h) 食糧需給　本調査だけは調査対象を異にし，隠岐全体にわたり調査した。すなわち隠岐の特徴的な代表的地区を踏査して聽取調査をなすと共に資料を集め，県発行諸調査資料をも併せて調査を取まとめた。

以上の内農業経営，養畜技術，耕種技術の調査は主として農家を対象とした聽取調査であるから，その正確性には或る限度がある。その上牧畑の面積や収量の如きも不確実であつて，正確な面積等は農家自身もわからないようである。それ故に一つ一つの数字の細部に問題があるのではなく，大きい傾向が把握できればわれわれの目的は達せられると考える。

牧畑の草生調査においても8月上旬一回だけの調査であり，草種はともかくとして草生量の如きはその意味が限定されるが，調査の都合上やむをえなかつた。他日補正したいと考えている。

(5) **取まとめの方法**　調査の分担に従い調査結果の取まとめを行つた。その成果は調査班において発表会を数回にわたり開催し，相互に検討をなした。そうして一調査としての筋とまとまりをもたすべく努力するとともに，意見の調整を試みた。この試は充分に目的を達することはできなかつたかも知れないが，一応このような報告書を仕上げることができた。（坂本）